

# 被災地派遣レポート＜第120回＞

総務局大島支庁土木課 大塚 陽介さん

## 1. はじめに

私は平成25年度の1年間、岩手県沿岸広域振興局に赴任しました。内心、災害復旧に関する職務経験のない私で大役が務まるのか不安でしたが、被災地の復旧復興に協力したいと強く思い赴任を決意しました。

## 2. 被災地の状況と担当業務

沿岸広域振興局は岩手県釜石市に所在し、釜石市と大槌町を所管しています。震災による被害は甚大であり、市街地から撤去されたガレキが市内、町内に点在する公園、グラウンド等の広い敷地に山積みの状態で仮置きされ、市町村の災害廃棄物分別処理事業による処理が急がれていました。

私の担当業務は、釜石市の釜石港の須賀地区と大平地区、同市の甲子川の松原地区における災害復旧工事の設計、工事監督や、国交省防災課との設計変更協議などでした。業務上、大変だったことは、漁業関係者や占用企業者、かつ近接施工業者との調整が多岐に亘ったことです。また、復旧規模が大きく、東京都でもなかなか発注しないようなかなり大きな工事の設計も行いました。さらに、実施設計時において、査定設計時から施工方法や工法等が大きく変わるため、国との設計変更協議のための資料作りにも苦労しました。

## 3. 職場環境

私の所属した土木部は、東京都から5名、静岡県から6名、福井県、新潟県から1名の計13名が派遣され、そのほかにも臨時職員の方々が加わり、90人近い職員で構成されていました。職場環境はとても明るく、プロパー職員の方々が我々派遣職員に対して気兼ねなく接してくださったので、公私問わず相談事、疑問に思うことを持ちかけることができました。本部所が抱える災害復旧事業が、課題・問題が山積みのなか順調に進捗している要因は、組織の団結力によるところが大きいと感じました。

## 4. おわりに

平成25年度は「復興加速年」ということで、岩手では多くの現場が動き出した年でした。1年間という短い期間でありましたが、災害復旧事業をいち早く進めていくにはどうすればいいかを一番に考え、現場の遅れが生じないよう現場の進行管理の徹底に努めてきました。現在も仮設住宅は数多く残っており、私も1年間仮設住宅で過ごすこととなりました。災害公営住宅の建設や防災集団移転地の造成は確実に実行されてはいますが、震災前と同様の生活をするにはもう少し時間がかかりそうです。

しかし、事業の進捗の遅れが時折話題となりますが、復旧は確実に進んできています。直接事業にかかわることだけが復興ではなく、観光に行くなど現地足を運ぶだけでも、多くの貢献ができると思います。平成26年度は東京都大島町の災害復旧事業に携わっていますが、岩手での経験を生かし、災害復旧事業を円滑に進めていけるよう、尽力していく次第です。